



Title	<書評> Jacynthe Tremblay, "Nishida Kitarô : Le jeu de l' individuel et de l' universel", CNRS, 2000
Author(s)	森野, 雄介
Citation	年報人間科学. 2014, 35, p. 149-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Jacynthe Tremblay***Nishida Kitarô: Le jeu de l'individuel et de l'universel***

CNRS, 2000

森野 雄介

はじめに

本書『西田幾多郎：個物と一般者の働き』は、カナダの日本思想研究者であるジャセイント・トランブレイによる西田の研究書である。彼女は、本書のほかに西田についての概説書を一冊と、西田の二番目の著作にあたる『自覚に於ける直観と反省』の仏語訳を出版しており、カナダ・フランスでの近代日本思想研究の先導者のひとりと言える。彼女は一九九〇年から十年間、東京大学に留学しており、その際に坂部恵に師事していた。そしてその後、彼女はモントリオール大学に研究員として招かれている。

タイトルから理解できるように「個物」と「一般者」の関係性が、本書のメインテーマとなっている。本書のなかで、彼女は西田の文章のもつ難解さに何度も言及しているが、その難解さはこの著作には見あたらない。わかりやすい言葉で、西田の思想を丁寧にかみくだいて説明している。また、本書の末尾には西田幾多郎の三つの論文の仏語訳が掲載されている。『一般者の自覚的体系』(1930) に収録されている「述語的論理主義」、「叡智的一般者」、そして『哲学論文集第三』(1939) に収録されている「歴史的世界に於ての個物の立場」のそれぞれが訳出されている。全九章からなる本書の章立ては、上記の三つの論文に対応している。それぞれ、第一章・第二章が「述語的論理主義」、第三章・第四章・第五章が「叡智的一般者」、第六章・第七章・第八章が「歴史的世界に於ての個物の立場」について中心的に言及されている。そして、第九章では、西田の晩年の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」で論じられる「逆対応」という概念が、ドイツの神学者カール・ラーナー（1904 - 1984）の思想との対比のもとに検討されている。本稿は第一章から第四章までの内容を確認した後に、第六章と第八章に焦点を絞って論じていく。なお途中の解釈は、できるかぎりトランブレイの解釈に沿っている。

「述語論理」

はじめに「述語的論理主義」に対応する第一章・第二章を見てみよう。第一章では、論文「述語的論理主義」に至る以前に提出された西田の概念である「自覚」と「場所」の説明がなされる。西田が「自覚」という言葉で強調するポイントは、「自らを映す（自覚）」作用のなかで「直観（見る）」と「反省（知る）」という二つの側面が同時に行われる点にある。その後、西田の主要概念である「場所」が説明される。西田の定義では「場所」とは「対象と対象の関係」を成立させ、この関係性を維持するものである。そして「場

所」はひとつではない。西田は私たちの認識構造のなかに様々な「場所」が階層的に折り重なっていることを論じている。

本書でトランブレーは「有の場所」・「対立的無の場所」・「絶対無の場所」という三つの「場所」を説明している。最初の段階にあたる「有の場所」という言葉で、「表象」としてあらわれる世界が示されているが、その世界はその下層に位置する「対立的無の場所」、つまり「意識」に支えられる形でありたっている。さらに「対立的無の場所」の下層には、対象化しえない「絶対無の場所」が位置している。トランブレーはここに伝統的な哲学とは違った形の「超越」というアイデアが西田に現れたことを示唆し、積極的に評価している。それは「有の場所」を包む「意識の野」、そしてさらにそれを包む「絶対の無」という順序に「意識」を経ながら「内在」の方向へと深まっていく在り方である。

第二章は、アリストテレス・ヘーゲルの論理学との比較をもとに、西田の「述語論理」という立場の解明と、そこでの「個物」と「一般者」の関係性の考察が主眼となっている。

アリストテレスの論理学では、「個物」つまり何らかの一般性に回収しえない「このもの」が「ヒポケーメノン」として判断の基礎となる「主語」として論じられていたが、西田はそれを逆転することを試みる。西田も「個物」の特徴を「主語となって述語とならない」という言葉で示すが、彼にとって重要であるものは、むしろ判断の際に「個物」を包摂する「述語面」つまり「一般者」にある。たとえば「この花は赤い」という判断であれば、「色の一般者」が主語となって述語とならない「個物」を追いかける形で判断が成立する。この「色の一般者」が「個物」を含むという「判断」を成立させる「場所」を西田は「判断的一般者」という言葉で示している。トランブレーがここで重要視するものは「主語」と「述語」が重なった形で現れる「具体的一般者」である。彼女によれば、西田の「具体的一般者」とは「主語となって述語とならない個物」でありながら、同時に「一般者」の「自己限定」であるという二つの側面を持つ。

それでは、論文「叡智的一般者」の内容に該当する第三章・第四章の内容を次に見ていこう。

「叡智的一般者」

西田において「表象」つまり「有の場所」は、私たちの意識である「対立的無の場所」によって下支えされていることはすでに見た。西田は『一般者の自覚的体系』のなかで、この「対立的無の場所」を「自覚的一般者」という名称に変更する。この名前の変更を受けて『一般者の自覚的体系』では、私たちの意識に対して「自らを映す」なかで発展していく「自覚」の作用が強調されていく。第三章では、この「自覚的一般者」の構造の説明に焦点が当てられる。この「自覚的一般者」に対して、西田はさまざまな役割を与えるが、記述は錯綜している。トランブレーの精細な読解が際立つのがこの局面であり、彼女は「自覚的一般者」を「知的自己」・「感情的自己」・「意志的自己」の三つの階層に区分しての説明を試みている。この試みにより、「自覚的一般者」の構造が非常に明快なものとして提示されており、さらに「自覚的一般者」を支える下部の「場所」を論じる際にも活用される。それでは「自覚的一般者」の三つの階層「知的自己」・「感情的自己」・「意志的自己」のそれぞれを見て行こう。

「知的自己」とは「AはAである」という自同律を下支えする意識の作用であり、「判断的一般者」と「自

覚的一般者」の交点となる。しかし、西田が「自覚的一般者」に対してもっとも強調するところは、「判断的一般者」には現れない「感情」を持つことにある。これが「感情的自己」であるのだが、トランブレーは、この「感情的自己」の解釈のなかで、フッサールの西田への影響を強調している。彼女によれば、西田においても感情はフッサールが論じた「ノエシス・ノエマ」という志向的關係のもとにある。そして感情は「ある・ない」という判断を宙づりにした形であらわれる。つまり、西田において感情は「判断留保」された状態のなかで働く。しかし「感情的自己」の下層にあたる「意志的自己」から、西田とフッサールとの違いが明瞭に現われてくる。西田にとっては「感情的自己」のなかで現れる「ノエシス」と「ノエマ」の作用は、ともにその下層の「意志的自己」の作用である「自由意志」が分化したものである。それでは、この「自由意志」は何によって支えられているのだろうか。ここでトランブレーは「自覚的一般者」の下層に位置する「叡智的一般者」へと歩みを進めていく。「判断的一般者」-「自覚的一般者」-「叡智的一般者」という区分が『一般者の自覚的体系』の前半部分の基本構造となる。

第四章では、上記の「叡智的一般者」の構造が論じられていく。西田において、「叡智的一般者」という言葉では「意識」のなかに取りきらない要素（たとえばアイデアなど）を包括する「場所」として示されている。

トランブレーは、「自覚的一般者」内の「知的自己」・「感情的自己」・「意志的自己」の三つの区分を有効に利用しながら、上記の三つの区分と「自覚的一般者」の下層に位置する「叡智的一般者」の關係性を探っていく。紙幅の都合上、充分には説明できないが、この章は本書の中心を担っていると言えるだろう。「知的自己」に対しては、カントの「私が考える」という形で対象界を構成する「意識一般」が、「感情的自覚」には「私が愛する」という「自愛」の作用によって「意識」に浮かぶイメージを固定する「芸術的直観の自己」が、「意志的自覚」には「目的」という形で「多」を連結し、ひとつの世界像を産出する「良心」がそれぞれ対応する。

評者の意見では、論文「叡智的一般者」で論じられている「行為的自己」に対しての記述が少し欠けているように思える。「叡智的一般者」という言葉だけを見れば、なにか経験的な世界を超越したもののように取られがちであるが、「叡智的一般者」という言葉で西田が示唆したものは「行為する自己」と「アイデア」の関わりをどのように表現するのか、という問題であった。『一般者の自覚的体系』の後半から特にこの点は強調されており、末尾の「総論」では「叡智的一般者」の名称は「狭義に於ける行為的一般者即ち叡智的一般者」と変更されている。

さて、論文「叡智的一般者」に対応する第三章・第四章の内容をいままで見た。第六章以降では西田の後期の思想、とりわけ彼へのライプニッツの影響が中心的に考察されていく。

「個物」と「モナド」

それでは、論文「歴史的世界に於ての個物の立場」の内容を確認しよう。この論文で西田はライプニッツの「モナド」を「個物」と置き換えて論述を進めていく。西田はライプニッツの「モナドロジー」を参照しながら、「個物」がそれぞれ外的な作用から独立していることを論じる。しかし西田の場合、「個物」は

他の「個物」に対することによって自身の独立性を確保する。これは一見、矛盾に思える。トランブレーは、ここで西田がライブニッツの「予定調和」を意図的にずらして解釈していることを強調する。つまり、西田もライブニッツ同様、「個物」と「個物」の相互関係のあいだに「神（もしくは「絶対の無」）」の仲介を認めるが、西田は「個物」と「個物」の関係性に「相互に否定しあう」という性格を見て取る。「個物」と「個物」は、自らが唯一の世界になるために、他の「個物」を「否定」する。いいかえれば「個物」は他を変容させることで自らの世界を築く。しかし、そのことは反作用として、「個物」自らの世界が他の「個物」によって「否定」され変様されることを意味する。ここで「相互否定」というタームが重要となる。

さらに、この「相互否定」が可能となるためには、絶対に異なった「個物」と「個物」が同列的な位置に存在する必要がある。ここで「個物」の「自己否定」という局面が重要となる。いいかえれば、自らの世界を抜け出し、他の「個物」と共通するための「公の場」へと自らを投げ入れる必要がある。そして、この「個物」の相互作用のなかで密やかに「公の場」は、自らを形作っていく。この「公の場」とは「社会」や「環境」を意味するものであり、またその最も深い位相に「一者」が意図されている。

第六章で、トランブレーはライブニッツの「表現（表出）」概念が西田に与えた影響を考察している。ライブニッツにおいて「モノイド」はそれぞれの視点から「宇宙」を「表出（表現）」する。西田はこの文脈のなかで、ひとつの宇宙がそれぞれの「モノイド」を介して多元論的に現われる、という論点を強調する。「個物」はそれぞれのパースペクティブによって多くの「個物」から成り立つ「世界」を「ひとつ」のものとして「表現」すると同時に、それら「個物」それぞれが、「ひとつ」の「世界」の「表現」である。ここでトランブレーは「表現」を介して、「多が一」であり「一が多」であるとする以降の西田の立場、つまり「絶対矛盾的自己同一」が現われていることを指摘する。トランブレーの意見では、西田の晩年の立場である「絶対矛盾的自己同一」はライブニッツの影響下に形成されたものである。

第八章では、再びライブニッツの影響が西田のテキストに読み込まれる。この章も「絶対矛盾的自己同一」が考察されていくが、ここにトランブレーはライブニッツの影響を強く読み込む。トランブレーは「絶対矛盾的自己同一」に、「物質的世界」・「生物的世界」・「歴史的世界」の三つの段階が見受けられることを指摘する。そして彼女の意見では、これはライブニッツの「第一物質」・「第二物質」・「魂もしくは精神」という三つの区分から影響を受けたものである。確かにこの区分は、西田のテキストのなかに確認することができるが、評者はこの解釈をそのまま受け入れることができない。なぜなら、生物学の知見を取り入れた論文「論理と生命」(1936) や論文「生命」(1945) のなかで、西田が「行為」を通じた「動物」と「人間」のある種の連続性を論じていることが理由である。さらにこれらの論文ではベルクソンが論じた「植物的生」・「動物的生」・「人間の生」という区分の影響、そして差違が重要となる。

前述の論文「論理と生命」のなかでは、西田は「手」と「眼」の分離という身体的構造に由来して「内的世界」と「外的世界」との対立が成立するという点に「動物」と「人間」の非連続性を見いだしている。このことは「行為」の際に「イデア」を見出すという「叡智的一般者」から論じられてきた位相と重なるものであり、単なる機能的な差異ではない。評者としては、「動物」と「人間」との連続性をいったん容認したうえで、ふたたび「人間」と「動物」の非連続性を強調するという論点から西田の後期の「身体論」

をふたたび捉えなおしてみたい。

おわりに

いままでジャセイント・トランブレの著作『西田幾多郎: 個物と一般者の働き』の内容を見てきた。本書は一貫して上記の副題に沿う形で論じられており、内容も西田のわかりにくい概念区分が丹念に整理されている良書である。しかし、「個物」と「一般者」の関係性がさらに綿密に論じられ構築されていった『無の自覚的限定』(1931) もしくは論文「弁証法的一般者の世界」(1933) がほとんど触れられていない点は残念である。評者の意見では、西田の「個物」と「一般者」の関係性の核心は上記の論文のなかで論じられている。そしてトランブレは論じていないが、ライプニッツの影響が決定的な形で現れる局面はこの著作ではないだろうか。つまり、評者の意見では西田が他者論のなかで示す「絶対の他」という概念はライプニッツの影響下に形成されたものである。評者はこれらの著作を中心に、西田における「個物」と「一般者」の関係性を考えていきたい。